

# HOKUSEI@COM

2009・JANUARY

vol.7

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY  
COMMUNICATION MAGAZINE WINTER EDITION

## 北星学園大学

北星学園大学短期大学部



### 02-03

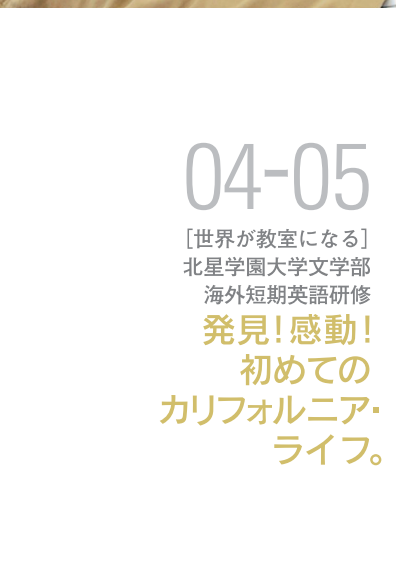
[特集]  
『北海道じゃらん』  
編集長  
ヒロ中田さん  
インタビュー



### 02-03

連携&競争。  
そして、創客へ。  
人生観を変えた  
北海道で、  
観光に生きる。

(株)リクルート北海道じゃらん  
編集長 ヒロ中田さん



### 04-05

[世界が教室になる]  
北星学園大学文学部  
海外短期英語研修  
発見!感動!  
初めての  
カリフォルニア・  
ライフ。



### 06

[学生たちの素顔]  
セバタクロ-日本代表  
萩原 雄太さんに聞く  
世界一の  
夢に向かって、  
オーバーヘッド  
キック!



### 07

[学生たちの素顔]  
歌手  
高橋 生さんに聞く  
北海道を  
ステージに、  
歌う、学ぶ、生きる



### 08

[HOKUSEI INFORMATION]  
北星学園大学からのお知らせ

官・民・学の力を、ひとつに  
**三者連携協定**  
厚別区の冬を熱く盛り上げます!  
第4回 新さつぽろ冬まつり





## [特集] INTERVIEW

『北海道じゃらん』編集長 ヒロ中田さんインタビュー

連携&競争。そして、創客へ。  
人生観を変えた北海道で、  
観光に生きる。

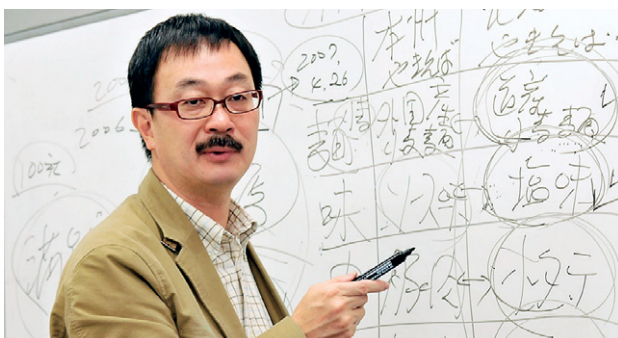
北海道名物といえばカニ、じゃがいも、チョコレート? そんな常識を覆す新しい“北海道ご当地グルメ”が、いま続々と誕生しています。「食」と「観光」をテーマに、ユニークなアイデアで北海道を元気にする仕掛け人、ヒロ中田さん。メガネとヒゲがトレードマークの穏やかな笑顔に秘められた北海道観光への熱い想いを、ふたりの学生が伺いました。

### 奇跡の出会いから生まれた「北見塩やきそば」。

清水川: 中田さんは北海道の新・ご当地グルメのプロデューサーとして「白いプリン」「富良野オムカレー」などたくさんのヒット商品を生み出していますが、中でも大ヒットした「オホーツク北見塩やきそば」の誕生秘話をお聞かせいただけますか?

中田: 始まりは2006年8月、東京へ向かう飛行機の中でした。機内誌で「日本三大焼きそば」として静岡の富士宮焼きそば、秋田の横手焼きそば、群馬の太田焼きそばが紹介されている記事を読んだんです。私はかつてその中のひとつを食べたことがあるんですが、正直言って何の変哲もないソース焼きそばでした。ならば北海道で日本三大焼きそばに負けない焼きそばを作ったらどうか、と考えたんです。基本は“地産地消”。麺は外国産小麦ではなく北海道産小麦、味付けは海に囲まれた北海道らしく塩味で、具材も北海道ならではのホタテとタマネギ……もちろんこれは私の空想で、飛行機を降りるころにはすっかり忘れていました。

清水川: すぐに実行されたわけではないですね。



中田: こういう話はえてして空想の段階で立ち消えることが多いんです(笑)。ところがその3ヵ月後、奇跡が起こりました。たまたま北見市の観光懇談会に参加することになり、焼きそばのことを思い出したんです!そこで当時の北見市長に地域振興のアイデアとして提案したのですが、残念ながら行政は動いてくれませんでした。ところがここでさらなる奇跡が!市長の隣で話を聞いていたホテルの総料理長が賛同してくださり、翌年2月に有志の会が結成されたんです。北見市は2006年3月に市町村合併され、新たに北見市となった端野町はタマネギ、常呂町はホタテが名産品というのも素晴らしい奇跡でしたね。さらに留辺蘂町名産の木材を割り箸に使用することを条件に加え、地元食品加工技術センターが専用麺と塩ダレの開発を手がけて試食を重ね、2007年4月26日に「オホーツク北見塩やきそば」がデビューしたわけです。



オホーツク北見塩やきそば

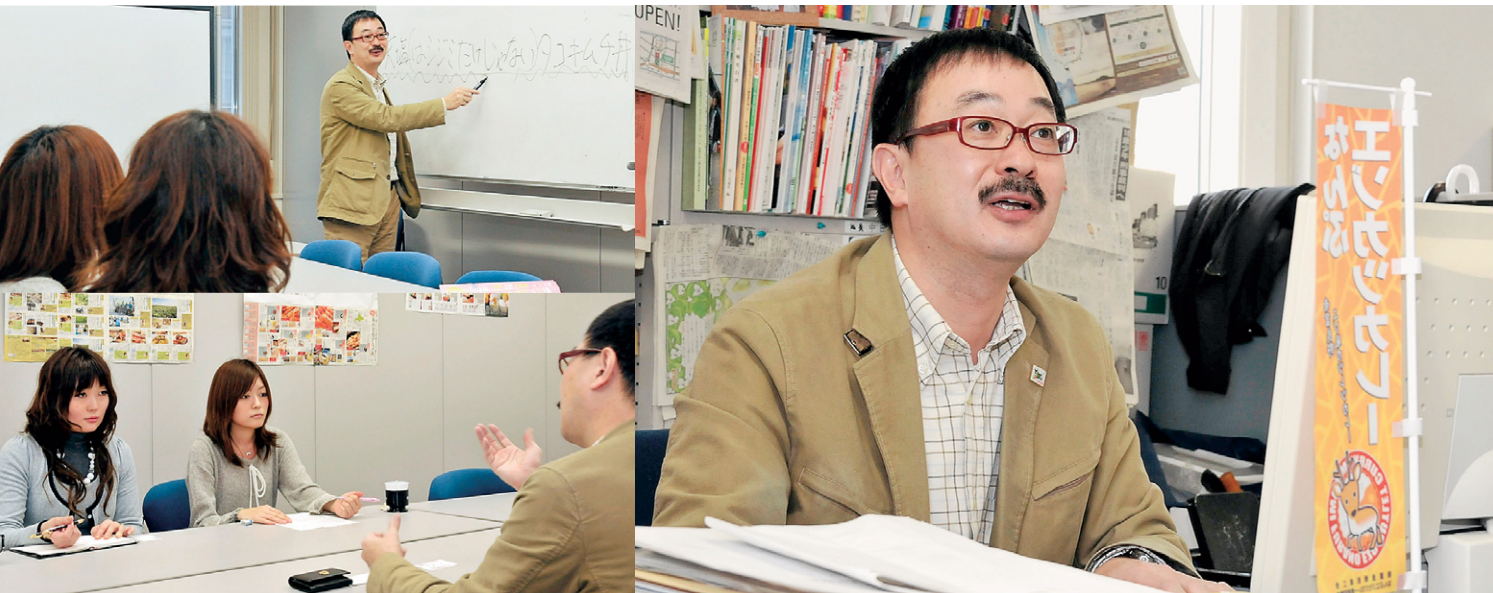
近藤: ドラマチックですね!どのくらい売れましたか?

中田: 1年半で14万食売れました。実は北見市はそれまで観光満足度が非常に低かったのですが、北見塩やきそばのヒットにより4ランクもアップ。「食」による地域振興の可能性を証明した形になりました。

近藤: “売れる商品”を作るポイントは何でしょうか?

中田: これまでも道内各地で新たな商品開発への取り組みが行われてきたのですが、なかなかうまくいきませんでした。その理由は、消費者ニーズをきちんと理解しないで、自分たちが作りたいものしか作ってこなかったから。商品開発を行う上では、消費者という外からの視点で地元素材を見つめなおすことが不可欠です。ご当地グルメの新作「天塩はシジミだけじゃないタコキムチ丼」も、地元側から「天塩名物のシジミをあえて使わない商品」という要望から生まれました。それが今まで注目されなかったミズダコとキムチという食材の発掘につながったわけです。





## PROFILE INTERVIEWER



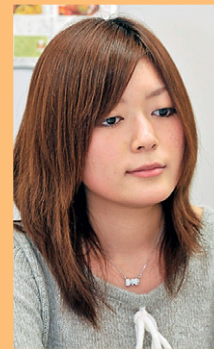
な かつ  
ヒロ中田

1960年生まれ。広島県出身。慶應義塾大学卒業後、(株)リクルートに入社。10年間人材採用ビジネスに携わったのち、海外旅行情報誌『エイビーロード関西版』副編集長、『北海道じゃらん』副編集長を経て1999年10月同誌編集長に就任。2005年より(株)リクルート北海道じゃらん執行役員に就任。現在に至る。



経済学部  
経済学科2年  
しみずがわ なおこ  
清水川 直子

「北海道じゃらん」編集部は若い女性スタッフが多いと聞いていたので、編集長としての中田さんのお話にもとても興味がありました。「会話を鍛えよ」とのアドバイスを、就職活動にも活かしたいですね。



経済学部  
経済学科2年  
こんどう えり  
近藤 恵里

函館の中・高校出身なので観光は身近な存在でしたが、将来の新幹線開通の影響も気になっていました。中田さんのお話を伺って、函館もまだまだ努力の余地があると実感。北見塩やきそばもぜひ食べてみたいと思いました。

清水川: 私は余市町在住ですが、地域振興のヒントをいただけないでしょうか？

**中田:** 観光客はニセコへの通過点として余市を通り過ぎることが多いので、立ち止まらせて消費させる仕掛けが必要。果物や海産物など魅力的な食材がたくさんあるのだから、上手に活かして新名物を生み出してほしいですね。地域振興で大切なのは連携と競争。そして創客。かつてライバルだった町の飲食店が仲間として手を組み、良い商品を作ることで、それを求めるマーケットが創られていくのです。

### 編集長として、プロデューサーとして、観光に生きる。

近藤: 中田さんは情報誌『北海道じゃらん』編集長として活躍されていますが、毎日のライフスタイルは？

**中田:** とにかく道内各地を駆け回る日々ですね。どこに行ってもネタ探しをしています。休みは1カ月に2〜3日ほどですが、つねに面白いことはないかと考えているので、実質的には365日働いているようなものですね。

清水川: エネルギッシュですね。仕事が大変だと思うことはありませんか？

**中田:** 仕事のスタンスがはっきりしたここ数年は、仕事がとても楽しいですね。かつては情報を集めて特集を組めば雑誌が売れたけれど、インターネットの普及によってメディアが多様化した今、雑誌の優位性は失われました。単なる情報の伝達ではなく、編集者自らが話題を仕掛けて消費者を動かすコンテンツ作りが不可欠なのです。その意味で「北海道の食」を核とした観光発信という現在の編集スタイルには自負を持っています。



近藤: 中田さんは広島県出身だそうですが、もともと北海道に関心を持たれていたのですか？

**中田:** いいえ全く(笑)。東京の大学を卒業して(株)リクルートに入社し、その後大阪へ転動しましたが、いずれは東京に戻るつもりでした。だから突然北海道への転動を命じられて驚きましたね。当時の私は出世意欲がとても強く、東京がビジネスの中心だと思っていたので、北海道なんて冗談じゃない、と上司に抗議したほどです(笑)。でも実際に住み始めたら、すっかり北海道が気に入ってしまいました。魅力的な素材があふれていて、マーケットスケールが自分に合っている。そして何よりも人生の価値基準が変わりました。企業人として出世するよりも、地域に必要な企業でありたい、と。北海道で一生暮らすつもりで、すでに転籍も済ませました。北海道観光に生きる——それが私のアイデンティティであり、人生のテーマなのです。

清水川: 中田さんのご経験をもとに、これから社会に出る私たち学生にアドバイスをお願いします。

**中田:** まずは社会人としてのマナーを身につけること、そして会話を鍛えること。会話はコミュニケーションの基本です。会話を鍛えるために、毎日3時間、テーマを決めて会話するトレーニングをしてもらいなさい。有益で楽しい会話を続けるためには考えを明確に伝える語彙力、そしてあらゆるジャンルにわたる知識の引き出しが必要ですから、とてもいい勉強になりますよ。

清水川: 近藤: 今日、私たち学生にもためになる貴重なお話をありがとうございました。





The world-wide classroom

世界が教室になる

# 発見!感動! 初めての カリフォルニア・ ライフ。

北星学園大学文学部では、学生の語学学習の一環として毎年夏に「海外短期英語研修」を実施しています。2008年度は8月にアメリカ・カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)で4週間のプログラムを実施、30人の学生が参加しました。海の向こうで学生たちは何を体験し、何を学び、どんなことを考えたのか? 帰国後も感動さめやらぬ4人がのびのびと語ってくれました。



文学部  
英文学科  
3年 片野 はるかさん



文学部  
英文学科  
2年 小松 亜由美さん



文学部  
英文学科  
2年 藤田 健太郎さん



文学部  
心理応用コミュニケーション学科  
2年 田中 美有さん

## 甘えへの気づき、自立への第一歩。

みなさんが海外短期英語研修に参加したきっかけは何ですか?

**藤田:** 親の仕事の関係でトルコで生まれたためか、ずっと海外に興味がありました。長期留学を希望しているので、今回はその基盤作りのつもりで参加しました。

**小松:** 私は英語を学ぶことはもちろん、アメリカの文化を肌で実感してみたくて。とはいえ初めての海外に1人で行くのはちょっと怖いかな、と……。

**田中:** 研修は仲間がたくさんいるし、江口先生も同行するから安心して参加できたよね。私は心理・応用コミュニケーション学科だけど英語が好きで、留学に興味があったので参加しました。参加費用も自分の貯金で賅って。

**片野:** 偉いね! 私も留学に憧れていたものの、お金がかかるので無理かな、と思っていたんです。でも1ヵ月の短期研修なら費用が安く抑えられるし、3年生の私にとっては就職活動前に海外へ行く最後のチャンスだったので、思いきって参加しました。

**小松:** 留学に興味がある点ではみんな一致しているけれど、現地での生活ぶりはさまざまだったね。

**片野:** 私は若い夫婦の家にホームステイしたんだけど、初日は生活に関する説明もなく食事もなし……アットホームに迎えてもらえると思いついていたのでショックだった(笑)。

**田中:** 私のホームステイ先は夫婦と子ども2人、さらに私のほかに留学生が3人。私だけ母屋から離れた別棟に部屋を用意されたので、ホストファミリーとの接点が少なくて困った。食事の時間を利用してコミュニケーションをとるよう心がけたので、すぐに仲良くなれたけど。



**片野:** 私も最初は困ったけれど、洗濯機の使い方や宿題といった小さなことでも自分から尋ねると親切に応じてくれてホッとしました。そこで、相手に話しかけてもらうのを待っているのはただの甘えだったと気づいたの。はじめは「アメリカ人は冷たいなあ」と思ったけど、むしろそれは意志のある大人として認めてくれている対応だったのね。

## 国民性、英語教育…… 世界を知り、日本を知る。

**小松:** 研修にはさまざまな国の学生が参加していたけれど、日本人がいちばん多かったね。

**藤田:** ぼくが生活していた留学生専用アパートでは、ルームメイトに日本人がいたのでつい日本語で話してしまって……せっかくアメリカにいるのに、と焦りを感じたな。でも学校で仲良くなった外国人の友だちとは今でも英語のチャットで話しているよ。

**小松:** 私も留学生専用アパートで日本人と韓国人のルームメイトと生活していたのだけど、掃除の際に韓国人学生に「日本人はきれい好きね」と言われたの。ふだん自分では意識していなかったけど、外国人には日本人はきれい好きに見えるのかな？



**田中:** 国民性の違いもあるかも。台湾人は日本人にとても親しみを持ってきていて、すごくいい人だった。イタリア人はよくも悪くも大らかで、やけにスキンシップしてくるので戸惑うことも多かった(笑)。

**小松:** イタリア人は英語に対しても大らかかつ積極的だったのが印象的だった。発音や文法が少々おかしくても、間違いを恐れずどんどん話す姿勢はむしろ見習わなくちゃ、と思ったな。

**藤田:** 日本人は頭の中で英文を組み立ててから話す傾向があるよね。そのため授業中の発言でも他国の学生に遅れをとってしまいがち。文法から学ぶ日本の英語教育のデメリットを痛感して、最初は落ち込んだよ。

**片野:** 「間違っても伝わればいい」と気持ちを切り替えることが大切だよな。私も最初は恥ずかしかったけど、積極的に話さないともったいない!と思うようになった。

**田中:** 少しずつコミュニケーションができてくると嬉しくて、だんだん日本語を使うほうが恥ずかしくなくなる。こうなると生活のすべてが楽しくなってくるよな。

## お金で買えない価値がある、成長の日々。

——現地ではどんな生活ぶりだったのですか？

**小松:** 英語のレベル別に、それぞれのクラスで1日4時間の授業を受けました。内容は、会話がメインのクラスやテキストを使った文法中心のクラス、宿題やテストが多いクラスなど、さまざまでした。

**田中:** ランチはスーパーで買ったベーグルや6ドルで食べ放題の大学のビュッフェがほとんど。

**藤田:** 食費を節約したくて、ビュッフェでランチを思いきり食べて夕食抜きという日も多かったなあ(笑)。

**片野:** ふだん節約している分、週末にはディズニーランドやアウトレットモールへ出かけるなど、楽しむところは楽しんでいたよな。

**小松:** でもいちばん楽しかったのは海! 西海岸のスケールと美しさは忘れられない。

**藤田:** ぼくも授業が終わると台湾人や韓国人の友だちとサーフィンをしてきたよ。サンディエゴでの1ヵ月は、お金はないけどほんとうに豊かな日々だった。日本の常識でははかれないほど、視野が広がったと思う。



ディズニーリゾートで「トイ・ストーリー」のバズ・ライトイヤーといっしょに。



授業が終わると学校の近くのビーチへ。海の青さが違います。

**片野:** アメリカは、自分で判断して行動し、きちんと自己主張できる大人を求める国。おかげで精神的に強くなれたと思う。日本の若者は甘やかされているな、と感じた一方で、相手を思いやる日本人のやさしさを再認識できたのもよかった。

**小松:** 実は私とても気が小さいのだけど、予想外の出来事に毎日遭遇するうちに「なんとかなるさ」と思えるようになった。臨機応変に行動できるようになると、英語力もぐんと伸びた気がする。

**田中:** 私はもともとあまり人見知りしないほう。今回の研修でも学校や地域でたくさんの人々と知り合えて、「一期一会」のすばらしさを実感できた1ヵ月だったわ。国を超えたコミュニケーションを学べたことは、心理学の勉強や社会生活でもきっと役に立つと思うな。

## 座談会を終えて

研修前はほとんど接点のなかった4人。アメリカでの感動的な1ヵ月を共有したことで、彼らの間にはかけがえのない友情の絆が結ばれました。座談会の収録が終わっても賑やかな思い出話は尽きることなく、全員が「また海外へ行くならぜひサンディエゴへ!」と再訪の夢をふくらませています。



## 研修参加者の感想から

**Q** 心の成長をもたらしたきっかけは？

**A** 最初の1週間は授業で全く発言できずモヤモヤ。このままではせっかく来た意味がないと思い、間違ってもいいから発言するようになり、積極性が強くなったと思います。アメリカ人の自由な生活ぶりを見て、他人に合わせたり頼ったりではなく自立すること、意思を言葉で伝えることの大切さを実感しました。

**Q** 研修ビフォー&アフターの違いは？

**A** 自分に自信が持てるようになったこと。以前は自分を他人と比較したり、どう見られているか気になったり、とてもネガティブだったけれど、研修を通して今まで気づかなかった自分のすばらしい長所を発見することができました。今ではいつも「I'm No.1!」と思っています。





個性豊かな本学学生の中から、  
キャンパスを飛び出して  
スポーツやエンターテインメントの  
世界で活躍する  
ふたりの学生をご紹介します。

## 世界一の夢に向かって、 オーバーヘッドキック!

セバタクローをご存じですか？  
まだ競技人口の少ないこのスポーツに  
たったひとりで挑戦を始め、  
日本代表に選ばれた萩原雄太さん。  
昨年8月の世界選手権ではついに  
Division 1優勝を果たし、  
念願の金メダルを獲得しました。  
大学体育館の片隅から世界へ  
アタックを決めた、夢の軌跡をたどります。



セバタクロー日本代表  
経済学部 経済法学科4年  
はぎわら ゆうた  
萩原 雄太さん

### ひとりで走りはじめた、セバタクローへの道。

セバタクローは東南アジア発祥のスポーツで、サッカーのようにボールを操りながら、バレーボールのようにネットを挟んで相手コートに蹴り入れる球技です。北海道の競技人口は300人弱というマイナースポーツですが、セバタクローの面白さは試合を観てもらえればわかります! バドミントンと同じ大きさのコートを縦横無尽に駆けめぐるスピード感、相手との距離わずか2mほどの位置から高さ150cmのネットの向こうに150km/hのボールを蹴り込む迫力、アクロバティックな足技の美しさ……ぼく自身小学3年から中学卒業までサッカーをやっていたのですが、サッカーにはないセバタクローの魅力にとりつかれています。セバタクローを初めて観たのはアニメ『キャプテン翼』。それからテレビでバンコク・アジア大会決勝の試合を観て衝撃を受け、自分もこんなカッコいいキックを決めてみたい! と思ったんです。



高校時代は自主トレーニングで身体能力の強化に努め、大学入学後に北海道大学のセバタクローサークルに入部。半年後の全日本セバタクローオープン選手権大会(Division B)で準優勝でき、さらに上をめざす気持ちが強くなりました。

### 世界一の夢。子供たちへ伝えたい未来。

さらに2003年に北海道大会で優勝、2006年に全日本学生選手権で初優勝を重ねたにも関わらず、日本代表に落選。勝っているのに選ばれないのが悔しくて、もう辞めてしまおうと思ったのですが、大学の先生に「辞めちゃダメだ。今は努力する時期だ」と言われて再び練習に打ち込んだ末、翌年晴れて日本代表に選出されました。あのとときの言葉がなければ、辞めていたかもしれません。関東圏の選手とふだん一緒に練習できない地方在住選手には、一度の本番で結果が求められるというハンディがあります。でもそれが勝利の意欲につながるし、勝つことで仲間としての一体感が生まれます。昨年8月の第23回キングスカップ世界選手権(タイ)では日本代表としてDivision 1優勝を果たし、念願の金メダルを獲得。世界に手が届いた喜びとともに、周囲の人々のありがたみも実感しましたね。海外遠征のために協力してくれる家族や友人、先生、応援してくれる方々の存在は、大きな心の支えになりました。目下の目標は今年の世界選手権でトップカテゴリーのPremier Divisionに出場すること、そして2010年広州アジア大会で優勝し、世界No.1の実績を重ねて、将来はプロとしてセバタクローに専念するのが夢です。



そして、世界レベルの技を北海道の子供たちに見てもらい、次世代のセバタクロー選手を育てたいと思っています。縁あって現在も道内各地で小中学生向けの講習会を行っており、土市市内の中学校では体育の授業にも採用してもらいました。今後もセバタクローが北海道に根付いていくことを願っています。

大学体育館から世界へはばいた萩原さん。その功績は学内でも高く評価され、学長特別表彰および大学同窓会特別表彰を受けました。







## 北海道をステージに、歌う、学ぶ、生きる。

第一印象は、愛らしい笑顔と明るいキャラクターが心なごませる癒し系。でもひとたびマイクに向かうとソウルフルかつ情熱的な歌声で聴く者を魅了する——彼女の名前は高橋<sup>なる</sup>生。北星学園大学で学ぶ傍ら、プロのボーカリストとしてライブやイベントで活躍する彼女の素顔に迫ります。



歌手  
経済学部 経済学科1年  
たかはし なる  
高橋 生さん

自分の言葉がメロディになるのは不思議な感覚で、言葉に対する視点も変わりました。メッセージを発信するだけでなく、歌う歌詞の意味を深く考えるようになり、表現力にも変化が出てきたように思います。歌詞のモチーフは自分の日常生活がほとんどですが、これからいろいろな経験を重ねて、より創造性豊かな世界を表現していきたいですね。今はとにかくステージで歌えることが楽しくてたまりません。出る直前はものすごく緊張するけれど、ステージに立った瞬間に別世界になるんです！いい歌を聴いていただくためと思えばレッスンも苦にならないし、少しずつ成長している自分に手応えを感じています。

マキシシングル  
『あきのうた／クリスマスはみんなで』で2008年9月にデビュー。あどけない表情とソウルフルな歌声のギャップが魅力。



### 勉強と音楽を両立して、プロ歌手の道へ。

幼いころから歌うことが好きで、高校時代にはアルバイトをしながらボイストレーニングに通っていました。チャンスが訪れたのは高校3年の夏。ある音楽オーディションにエントリーしたのがきっかけで、音楽レーベル“Beat Shake Records”（ハドソン）で本格的な音楽活動をスタート。時期を同じくしてUHBの番組『タカアンドトシのどおーだ!』のユニット「どおーだガール」のオーディションにも合格し、生活が一変しました。高校の授業に歌のレッスン、テレビの収録……なんともめまぐるしい毎日でしたが、とても充実していました。大学に入学し、「どおーだガール」を卒業した現在も、音楽活動と勉強の両立に努めています。飲食店でアルバイトもしているんですよ。この間お客さまに声をかけられてうれしいやら恥ずかしいやら……サインを求められて、何もなかったので売上伝票にサインしてしまいました(笑)。

### 作詞、レッスン、ステージ…… すべてが楽しい!

昨年9月にマキシシングル『あきのうた／クリスマスはみんなで』で念願のCDデビューを果たしました。レコーディングが大学の試験と重なっていたので大変でしたが……収録曲では初めて作詞にも挑戦したんですよ。

### 北海道から発信する歌を、もっと多くの人々へ。

幼いころから歌手を夢みていましたが、デビューするにあたって東京という選択肢は私の中にはありませんでした。生まれ育った北海道で大学生活を送り、北海道で暮らしながら大好きな歌を続けていきたい——その気持ちは今でも変わりません。目標は福原美穂さん。彼女の歌声、同じ札幌出身で全国へ進出したこと、すべてが憧れです。私自身もチャンスがあればもちろんトライしたいけれど、北海道だからできること、学生時代の4年間にしかできないことを大切に、「高橋 生」だけの歌をたくさんの方々へ届けていきたいと思っています。







## TOPICS

官・民・学の力を、ひとつに

三者連携協定

### 札幌市厚別区、 (株)札幌副都心開発公社と 三者連携協定を締結

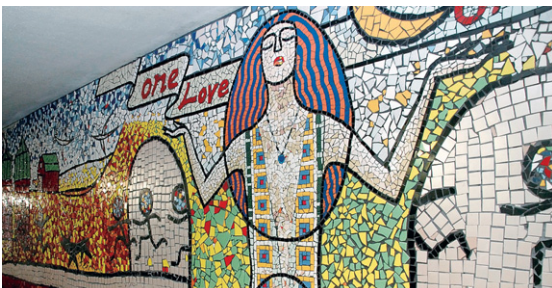


「北星学園大学・北星学園大学短期大学部、株式会社札幌副都心開発公社及び札幌市厚別区における三者連携協定に関する協定書」調印式



北星学園大学・北星学園大学短期大学部と札幌市厚別区、(株)札幌副都心開発公社では、厚別区の地域振興を促進する連携協定を締結。2008年10月8日に本学で調印式が行われました。大学と区との連携は豊平区・南区・手稲区に続く4例目ですが、企業が加わる官・民・学の三者連携は今回が初めてとなります。

本学では過去数年間にわたり、サイクリングロード「モザイクアート事業」の実施、厚別区民まつりや新さっぽろ冬まつりの運営協力、地域調査・ワークショップなど、厚別区・(株)札幌副都心開発公社と学生・教職員が、さまざまな形で連携活動を実践してきました。今回の連携協定により、三者が強いつながりを持ちつつ、今後もまちづくりや地域課題、教育・文化・スポーツの振興などに積極的に協力し合い、厚別区の活性化に寄与していくことをめざしています。さらに大学として培ってきた活動実績をベースに、本学が有する知的財産を地域社会に還元するとともに、学生の主体的な活動による地域貢献にも期待を寄せています。



モザイクタイルアートで生まれかわったサイクリングロード

## EVENT

厚別区の冬を熱く盛り上げます!

第4回 新さっぽろ冬まつり

### 新さっぽろ冬まつりの 企画・運営に 本学学生が参加



2月に開催される「新さっぽろ冬まつり」。本学ではこれまでも学生や教職員が実行委員会や企画会議、運営ボランティアの一員として活動してきましたが、三者連携協定締結後の今回、初めて本学の学生が主体的に企画・運営を地域の方々との協働で行うことになりました。「ワクドキスノーランド」をテーマに、体験イベントやゲームなど学生ならではのフレッシュな企画をたくさん用意して、みなさまのご来場をお待ちしています。

- 開催日 / 2月7日(土)、8日(日) 10:00～19:00(8日のみ18:00まで)
- 会場 / ふれあい広場あつぱつ、厚別区民センター、サンピアザ劇場ほか

